

## 景観の「原型」と「元」

—久米孔子廟の変遷について

侯 建衛

### 一 はじめに

私が沖縄に関心を抱くようになった契機は、泰山石敢当である。泰山石敢当とは、風水の実践であり、悪い「気」から人びとの生活空間を守護し、改善するために設置される石碑である（写真 1）。私は幼少期を中国河南省の農村で過ごしたが、建物の角や道の分岐点などに「泰山石敢当」と刻まれた石が置かれている光景を日常的に目にしてきた。そうした経験を背景に、約十年前、建築史家・郭湖生（1931–2008、東南大学元教授）が、文化・文明間の交流に鑑み、中国建築をよりよく理解するため、国境にとどまらない「東方建築史」という研究視座を提示した論考において、私は海を越えた沖縄にも泰山石敢当が存在することを知った〔郭 1992〕。その時、私はいつか沖縄を訪れ、現地での考察を行いたいと考えようになった。



写真1 沖縄の石敢当（2025年2月4日、筆者撮影）

さらに、2023年10月にオンラインで開催された石垣直氏による講演「琉球・沖縄における孔子廟・積奠の歴史と現在——東シナ海に浮かぶ『境界』という視点から」<sup>1</sup>を拝聴したことをきっかけに、琉球王国／沖縄と明清王朝／中国との深い歴史的関係、ならびにそれが孔子廟をはじめとする景観形成に及ぼした影響に、いっそう関心を持つようになった。

2025年2月初頭<sup>2</sup>、私は「海域アジア・オセアニア研究プロジェクト」の一環として、那覇市において資料採取を行う機会を得た。期間が限られていたため、私は主に那覇市内の文化的景観——孔子廟、天尊廟、波上宮、福州園、首里城——を考察し、なかでも孔子廟（久米至聖廟）の景観的変遷に焦点を当てた。あわせて、那覇市歴史博物館、沖縄県立博物館、沖縄県立図書館を訪問し、関連資料の収集を行った。

私は『久米崇聖会100周年記念史』を閲覧する中で、「元の場所」「往時の規模」「曲阜と同じデザイン」「かつて久米の地にあった孔子廟を久米の地に」などの表現に強い関心を抱いた〔久米崇聖会100周年記念史編集委員会（編） 2014：26-36〕。これらの言説が反復的に喚起する、時間的・空間的・文化的な意味での「元」とは何を指し、それはいかなる意義をもつのかを、改めて探究したいと考えるようになった。

本稿の目的は、久米孔子廟の景観的変遷を整理するとともに、現地の人びとが様式的な「原型」を通じて、歴史的・理念的な「元」にいかにかかわってきたのかを明らかにし、その意味を検討することにある。以下では、まず久米孔子廟の景観的変遷を概観したうえで、久米村の祖先およびその末裔による「元の配置」、「元の位置」、「元の景観要素」へのこだわりを類型化し、考察を行う。

## 二 久米孔子廟の変遷

まず、石垣直氏の関連論文〔石垣 2019、2020a、2020b〕ならびに那覇市歴史博物館および沖縄県立博物館の展示資料をもとに、日本・中国・琉球／沖縄の歴史的展開に即して孔子廟の歴史を整理すると、図1のようにまとめることができる。

---

<sup>1</sup> 参照：<https://www.maps.jinsha.tmu.ac.jp/activity/2023%E5%B9%B410%E6%9C%8827%E6%97%A5>  
2025年12月21日閲覧

<sup>2</sup> 2025年2月2日から7日にかけて、河合洋尚、郝雅楠、遠藤なつめと私の4人で、各自が各々の関心テーマを持って沖縄で短期調査を行なった。

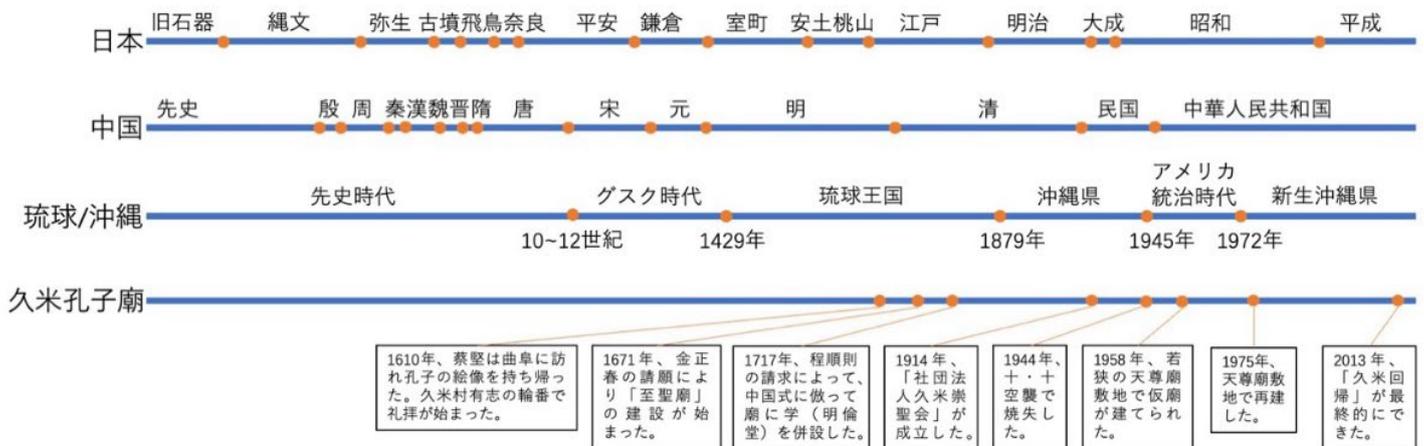


図1 中国、日本、琉球/沖縄と久米孔子廟の歴史の併置 (筆者作成)

1368年に明王朝が成立し、1372年には明と琉球との間に正式な朝貢関係が確立された。1392年には、琉球側が明の首都（現在の南京）に置かれていた中央官学である太学（その隣に孔子廟が所在する）へ留学生を派遣するとともに、明に対して職能集団の琉球への移住を申請し、その許可を得た。同年、明の洪武帝の命により、いわゆる「久米三十六姓」が主として現在の福建省一帯から久米村地域へ渡来し、以後、両国間の外交や貿易などに従事することとなった。<sup>3</sup>

明にルーツを持つ「久米三十六姓」の末裔が、儒教に対して強い憧憬を抱いていたことは容易に想像される。1610年には、その末裔である蔡堅が明に朝貢した際、孔子像を持ち帰り、久米村士族が輪番でこれを祀っていた。1644年には、満洲族が明王朝を滅ぼして清王朝を成立させた。久米村に孔子廟が創建される契機となったのは、1671年に金正春が琉球国王に対して行った請願である。さらに、中国における「廟学一体」という伝統にならい、廟に学校（明倫堂）を併設する構想が実現したのは、1717年に程順則が行った請願によるものであった〔石垣 2019〕。

1879年、明治政府による廃藩置県によって琉球王国は沖縄県となり、久米孔子廟（至聖廟・明倫堂）も、動乱期を迎えることとなった。1914年には「社団法人久米崇聖会」が設立され、以後、久米孔子廟の日常的な管理および祭典の執行を担ってきた。1939年秋以降、東京の湯島聖堂に倣い、積奠は従来の中国式から「神式」へと改められた。1944年には、

<sup>3</sup> 参照：  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B9%85%E7%B1%B3%E4%B8%89%E5%8D%81%E5%85%AD%E5%A7%93> 2025年12月21日閲覧

いわゆる十・十空襲によって久米孔子廟は全焼した。戦後は道路整備の影響により、旧地における孔子廟の再建は不可能となった。1958年には、廃墟となっていた天尊廟の敷地において、孔子廟の仮廟（正面幅2m・高さ1.5m・奥行1m）が、天尊廟および天妃宮の仮廟とともに建設された〔久米崇聖会100周年記念史編集委員会（編）2014：43〕。1972年には、沖縄におけるアメリカ統治が終了した。1974年末には、旧天尊廟の敷地において、孔子廟が天尊廟および天妃宮とともに再建された。さらに、旧久米郵便局の移転を契機として、2013年には孔子廟が再び「久米の地」へと回帰することとなった〔石垣2019〕。

以上の整理から、久米孔子廟の位置（図2）および形態（図3）の変遷の脈絡が明らかとなる。



図2 久米孔子廟の位置変遷（Google map より筆者加工）

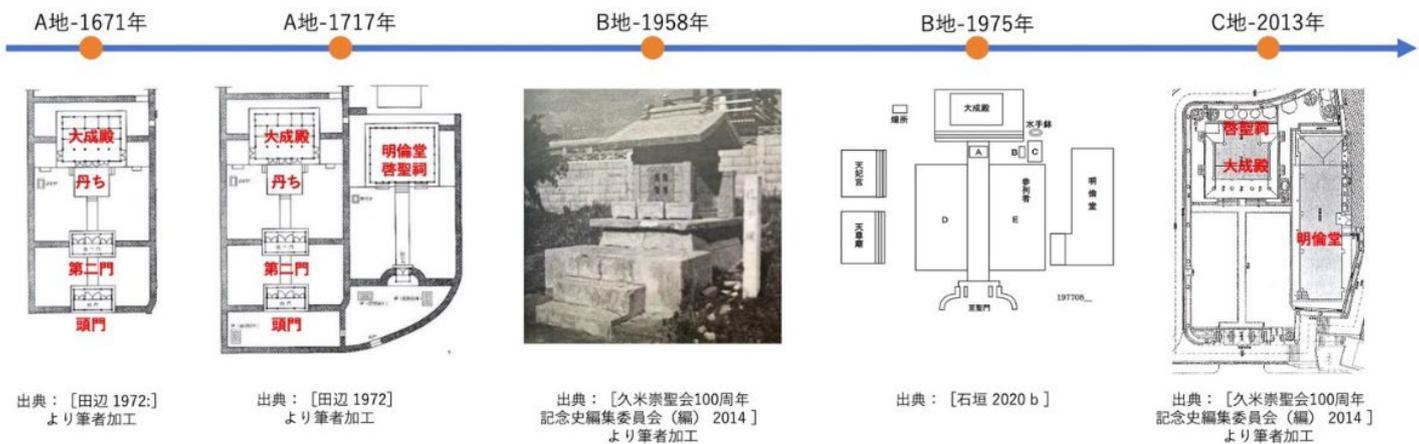


図3 久米孔子廟の形態変遷 (筆者作成)

### 三 久米孔子廟の「原型」と「元」

第二節では久米孔子廟の景観の変遷を整理したが、その形成要因については、なお十分に解明されているとは言い難い。すなわち、なぜ孔子の絵像を祀る状況から、国王への請願を通じて至聖廟の建立へと至ったのか、また、なぜ廟には必ず明倫堂という学校施設が併設されたのかという点である。さらに、戦後において「久米回帰」への強い希求が生じた背景はいかなるものであったのか、あるいは、至聖廟の大成殿に二本の龍柱を配し、その前方に「丹ち」という空間を明確に設けたのはなぜなのか、といった点も重要な問いとして残されている。河合洋尚は、このような「物的形態」をめぐる問いこそが、人類学において「景観」という概念を用いる最大の意義であると指摘する。そして、そうした景観の形成要因に迫るためには、微視的な行為主体中心のアプローチと、巨視的でグローバルな政治経済構造や視覚的イメージを統合した研究視点が必要であると提唱している [河合 2022]。

そこで以下では、配置・位置・景観要素という三つの側面から、久米孔子廟の景観的変遷を検討し、その過程において久米士族およびその末裔が、様式的な「原型」を通じて歴史的・理念的な「元」にいかにかかわってきたのかを分析する。

#### 1 「元」の配置

1671年に創建された至聖廟は、大成殿を中心とする「廟」のみから構成されていた(図3)。では、この「二進院」と呼びうる二重構成の中庭型平面配置の原型は、いかなるところに求められるのであろうか。

1644年、中国では清王朝による統治が開始された。後に孔子廟の創建請願者となる金正春は、1646年に明の残存勢力である南明政権が福州に成立したことを慶賀するため、琉球使者として朝貢に赴いたが、滞在中に南明を制圧した清軍によって北京へ連行された。その後、金は数回にわたって清に朝貢しており、その際に北京の「国子監」(孔子廟と太学から成る教育・儀礼施設)を訪問した可能性が高いと考えられる。少なくとも、1421年に明の首都が南京から北京へ遷都して以降、琉球側はたびたび国子監へ留学生を派遣しており、1671年に孔子廟が建立される以前の段階で、過去の留学生たちはすでに国子監の平面的配置を十分に把握していたとみられる。1683年に来琉した清朝の冊封使・汪楫が「なぜ琉球に孔子廟が存在するのか」と問いかけたのに対し、久米村の人びとは、1669年に琉球使者が清朝へ朝貢した際、現地の孔子廟を訪れ、深い感銘を受けたことがその契機であると答えた[伊藤 2010]。一方、明朝から清朝にかけて、首都北京の国子監は一貫して「廟学一体」の構成をとり、その内部における孔子廟の配置も、常に「二進院」の形式を維持していた(図4)[沈 2010]。以上を踏まえると、久米至聖廟の創建に際しては、北京国子監の配置が、少なからず参照されたと推測することができよう。

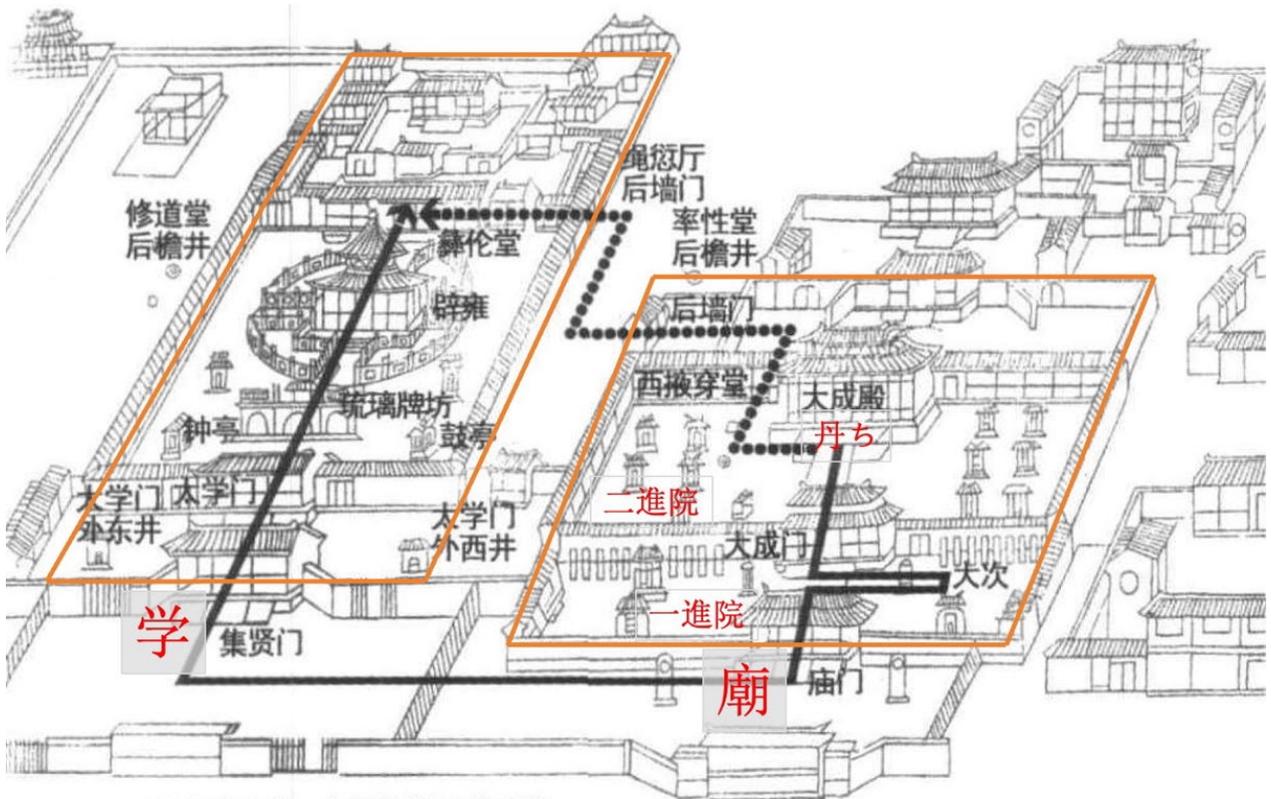


図4 清朝の北京国子監の配置（〔沈 2010〕より筆者加工）

では、1717年に至聖廟に学校が併設されるに至った要因は何であったのか。

その契機は、1683年に来琉した清朝冊封使・汪楫による提案に求められる。汪楫は海を越えた島嶼社会に孔子廟が存在することを不思議に思った一方で、そこに琉球の「中国化」、すなわち清朝天子の「徳化」が及んでいることに深い感銘を受けた。汪楫は、琉球におけるさらなる「徳化」を促進するためには、中国の伝統である「廟学一体」に倣い、孔子廟に学校を併設し、「礼制」（中央政権が規定する儀礼の制度）を完備することが必要であると提議した。その後、次回の冊封使の渡来までの間、清朝側に対して琉球の「徳化」の成果を示し、良好な朝貢関係を維持し政治的・経済的利益を獲得するため、1717年、程順則の請願によって、至聖廟の隣に「明倫堂」が設置された（図3）。これは、琉球における最初期の公立学校施設であった〔伊藤 2010〕。

戦後、仮廟期を除けば、孔子廟は二度にわたって再建されているが、そのいずれにおいても「廟学一体」という伝統的な配置は継承されてきた。ただし、図3に示すように、戦前には廟と学が二つの院に分かれて配置されていたのに対し、戦後の再建では、廟と学という二

つの殿堂が一つの院内に統合される形へと変化している。また、2013年に再建された孔子廟において啓聖祠が付設されたのは、2008年12月に崇聖会の理事らが台湾の台北および台中の孔子廟を視察し、大成殿の背後に啓聖祠が配置されている点を重視した緊急提言を行ったことが契機であった。しかしながら、台湾や中国大陸の孔子廟に見られるように、啓聖祠が独立した建物として大成殿の背後に設置されるという配置的「原型」と比較すると、久米孔子廟における啓聖祠の扱いは一貫して異なっている。すなわち、戦前の久米孔子廟では啓聖祠が明倫堂内部に設けられていたのに対し、現在の孔子廟では、その空間が大成殿の後ろに併設される形をとっている。

さらに、「丹ち」と呼ばれる空間も、形態を変えながら存続している。孔子および諸賢を祀る釈奠などの儀礼のため、中国では早くから大成殿の前面に「丹ち」と呼ばれる台状の空間が設けられてきた(図4にも丹ちを確認できる)。旧久米孔子廟においても、この伝統に倣って丹ちが設けられていた(写真2)。一見すると、現在の大成殿前には丹ちが存在しないように見える(写真3)。しかし、設計配置図(図5)を見ると、大成殿前の限られた空間が明確に「丹ち」と表記されており、私はこのことに違和感を覚えた。この空間は、建築学的には「軒下空間」と呼ばれるものである。にもかかわらず、配置図においては「丹ち」と表記されている。この表記の選択は、久米崇聖会の人々が共有する心象、あるいは「元」への強いこだわりを反映したものと言えるだろう。



写真2 釈奠時の旧孔子廟の大成殿と丹ち (那覇市歴史博物館 提供)



写真3 現在の孔子廟（2025年2月3日、筆者撮影）

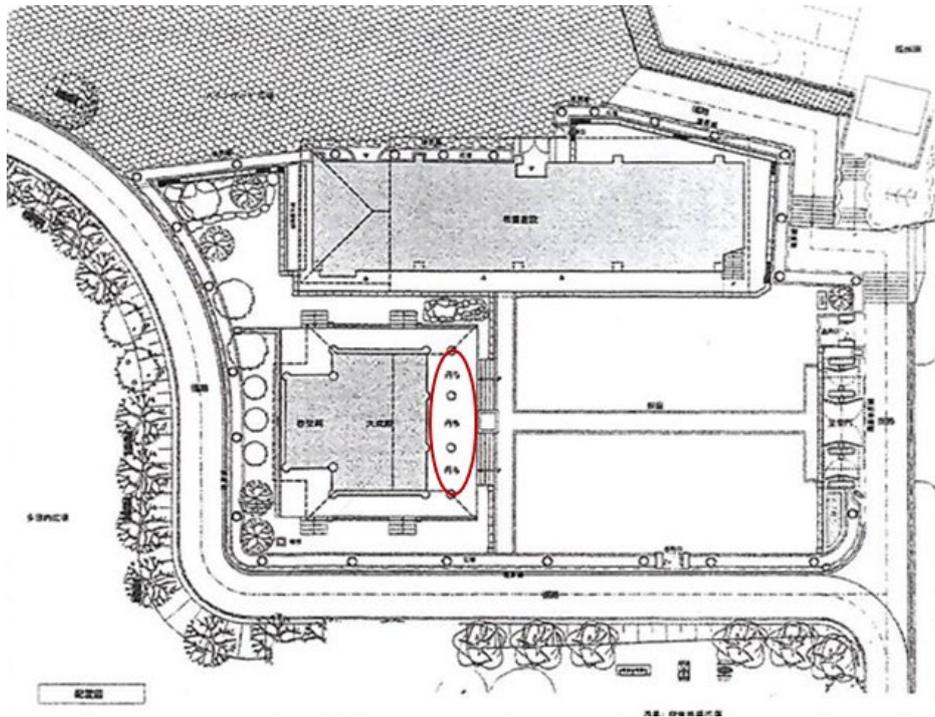


図5 「丹ち」という表記

（〔久米崇聖会 100周年記念史編集委員会編 2014：33〕より筆者加工）

厳密に言えば、かつての久米士族にせよ、今日の崇聖会にせよ、彼らが堅持してきたのは様式的な「原型」そのものではなく、「廟学一体」や「礼制完備」といった歴史的・理念的な「元」であったと言える。彼らによって建設されてきた孔子廟の平面的配置は、参照対象となった中国の伝統的配置をそのまま再現したものではなく、それと位相的な関係にあるものとして理解すべきであろう。

## 2 「元」の位置

図2に示すように、旧久米孔子廟（A地点）は、戦争や戦後の道路建設により、同一地点での再建が不可能となった。そこで、1963年の崇聖会理事会において、若狭に位置する天尊廟の敷地（B地点）での再建が計画され、1975年に落成した。しかしながら、道教施設である天尊廟および媽祖信仰の天妃宮との併存は必ずしも望ましいものとは受け止められておらず、加えて海岸に近い立地条件から建物の腐食が進みやすいという懸念もあった。そのため、久米の長老たちや関係者の間では、将来に「久米の地」への回帰が模索され続けていた〔久米崇聖会100周年記念史編集委員会編 2014：26〕。

1999年、旧久米郵便局が他所へ移転した。その跡地は国有地であったが、歴史的には「久米の地」に属していた場所である。崇聖会はこれを「またとない機会」と捉え、「久米回帰」を実現するための動きを積極的に進めていった。最初に提出された要請書では、都市における自然環境や公園空間の必要性を訴えるとともに、「旧久米村を象徴する歴史的景観を有する都市公園」の拡張・整備が求められていた〔久米崇聖会100周年記念史編集委員会編 2014：27〕。

では、なぜ「久米回帰」という特定集団の強い希求が、全市民を対象とする都市公園整備という形へと置き換えられたのだろうか。その背景には、当該跡地の土地所有権の問題があった。2000年から2010年にかけての約10年間、崇聖会、那覇市の行政部門、那覇市議会議員、さらには国の沖縄総合事務局財務部など、複数の主体のあいだで継続的な意見交換と調整が行われてきた。その過程において、作業の大きな部分を占めていたのが、土地の所有関係をめぐる調整であった。概略を述べれば、まず那覇市が国から当該地の所有権を取得し、これを都市公園用地へと転用したうえで、松尾公園の一部として当該地を位置づけた。その後、崇聖会は孔子廟を「教養施設」と位置づけ、当該地の無償使用を申請した。こうした一連の協議において、当初から繰り返し議論されてきたのは、孔子廟が宗教施設に該当するの

か否か、当該地の無償使用が妥当であるかという点であった [久米崇聖会 100 周年記念史編集委員会編 2014 : 27-32] 。

しかし、慎重に進められてきた土地の政治的・経済的関係をめぐる調整の紆余曲折の背景として、土地がもつ感情的・象徴的な意味を軽視することはできない。崇聖会の人びとにとって、孔子廟が回帰すべき「久米の地」とは、必ずしも歴史的な原点である A 地点に限定されるものではない。久米村への帰属意識、すなわちアイデンティティが共有されている限りにおいて、C 地点もまた「元」の地となりうるのである。

### 3 「元」の景観要素

琉球時代には朝貢や留学を通じて、また戦後以降は交流や祖先の痕跡をたどる営みを通じて、久米士族およびその末裔は、中国へと繰り返し足を運んできた。1610 年に蔡堅が孔子の絵像を持ち帰った事例に象徴されるように、現在の孔子廟においても、中国に由来する「元」の景観要素が、伝統的・正統的なものとして随所に取り入れられている。

たとえば、大成殿正面に立つ二本の龍柱や、正面階段中央に設けられた龍陛は、崇聖会の代表者が孔子の故郷である曲阜を視察し、曲阜孔子廟と同一のデザインおよび石材を採用したものである (写真 4)。積奠などの祭礼に用いられる重要な器具の多くも、中国大陸や台湾から調達されたものである。また、境内の一隅には一本の楷の木が植えられているが、その種子は曲阜の孔子廟に由来するものであると有意に伝えられている (写真 5)。その木の隣には、修復不能となった程順則揮毫の「中山孔子廟碑」が、残存する拓本や古文書をもとに復元され、設置されている。その石碑の側面には、以上の経緯が説明されている (写真 6) [久米崇聖会 100 周年記念史編集委員会編 2014] 。



写真4 大成殿正面の龍柱と龍陛 (2025年2月3日、筆者撮影)



写真5 曲阜の種子から生えた木 (2025年2月3日、筆者撮影)



写真6 孔子廟碑の正面と復元の経緯を説明する側面（2025年2月3日、筆者撮影）

崇聖会の人々が、龍柱や龍陛、祭礼用器具、楷の木の種子といった景観要素を、あえて中国から輸入した背景には、儒教の「源」あるいは「元」への強いこだわりがあると考えられる。また、すでに消失した石碑をあらためて復元する行為も、久米孔子廟自身の歴史的な「元」を顕彰しようとする実践であると、筆者は捉えている。

#### 四 おわりに：「元」とは何か

久米孔子廟の事例から明らかになるのは、現地の人びとが、単なる様式的な「原型」ではなく、歴史的・理念的な「元」へのこだわりを通じて、自らのアイデンティティを構築し、表明し、さらには強化してきたという点である。様式としての「原型」は、具体的な歴史的・社会的条件に応じて絶えず変化してきたが、歴史的・理念的な「元」が体现する「正統」や「伝統」への志向は、長期にわたって持続してきた。実際、建築史から見れば、中国における孔子廟の様式自体も、決して固定的なものではなく、時代ごとに変容を重ねてきたことが分かる。そこには中央と地方のあいだ、あるいは地方相互のあいだにおける差異も存在する。

しかしながら、「廟学一体」や「礼制完備」といった理念は、今日に至るまで一貫して影響力を持ち続けている。本稿において「元」というのは、まさにこのような理念的次元である。

波上宮や国際通りが多く観光客によって賑わいを見せるのに対し、孔子廟は相対的に静謐な空間である。このことは、「久米三十六姓」の末裔にとって、孔子廟の存在意義が観光資源としての価値にあるのではなく、「元」へのこだわりそのものにあることを示していると考えられる。その背景には、孔子および儒教に対する尊敬の感情が一貫して共有されてきたことに加え、歴史的には、中国側に対して「徳化」を示すことで政治的・経済的利益を獲得するという現実的要請が存在していたことが挙げられる。さらに戦後以降においては、久米村の祖先たちが築き上げた輝かしい歴史や、独自の孔子尊敬の伝統に対する誇りが、久米村人としてのアイデンティティ形成を強く支えてきたと考えられる。

本稿は、河合洋尚が提示する景観の「物的形態」の総合的形成要因を探究するアプローチに依拠し、久米孔子廟の変遷に焦点を当てて考察を行った。その結果、本研究は、郭湖生が提唱する「東方建築史」の問題意識にも一定程度応答するものになったと考えられる。今後は、関連する古文書や崇聖会に残された豊富な文字資料をさらに検討することにより、久米孔子廟の景観的変遷について、より詳細な議論を行っていきたい。

## 参考文献

- 石垣 直 2019「琉球・沖縄における積奠の歴史と現在——久米・至聖廟の事例を中心に」『南島文化』41：17-50。
- 2020a「戦後沖縄における久米・至聖廟再建と中華民国——1975年前後の協力・寄贈品とその政治・文化的背景への注目から」『南島文化』42：127-152。
- 2020b「戦後沖縄における積奠復興——『具志堅以徳収集文書』他にみる台北市孔廟からの影響」『南島文化』43：17-41。
- 伊藤陽寿 2010「久米村孔子廟創建の歴史的意義——十七世紀後半の政治的視点から」『沖縄文化研究』36：101-135。
- 河合洋尚 2022「なぜいま人類学が景観を論じるのか——景観人類学のマテリアル・ターンを再考する」『社会人類学年報』48：21-47。
- 久米崇聖会 100周年記念史編集委員会編 2014『久米崇聖会 100周年記念史』一般社団法人久米崇聖会。
- 郭 湖生 1992「我們為什麼要研究東方建築——『東方建築研究』前言」『建築師』8：46-

48。

沈 陽 2011 「明清北京国子監孔廟的空間格局演變」 『建築学報』 S1: 55-61。

(こう・けんえい 東京都立大学大学院)